

令和元年度 第1回鶴岡市地域医療を考える市民委員会 (会議概要)

- 日 時 令和元年12月19日(木) 午後 1時30分から
- 会 場 鶴岡市立荘内病院 3階 講堂
- 次 第
 - 1 開会
 - 2 委嘱状の交付
 - 3 あいさつ
 - 4 委員の紹介
 - 5 委員長・副委員長の選出
 - 6 説明・報告・協議
 - (1) 説明(趣旨説明、進め方等について)
 - (2) 講話(慶應義塾大学 秋山美紀先生)
 - (3) 地域医療に関するフリーディスカッション
 - 7 その他
 - 8 閉会
- 出席委員
瀬尾利加子(委員長)、本間志保子(副委員長)、北風寸美、木村博之、齋藤啓滋、佐藤明美、土田三香子、原田藤四郎、本間優子、真島正博、水口英俊、秋山美紀(コーディネーター)、三科武(オブザーバー)、鈴木聡(オブザーバー)
- 市側出席職員
健康福祉部長 白幡俊、健康福祉部次長兼地域包括ケア推進室長 渡邊健、地域包括ケア推進室主査 剣持健志、同室調整専門員 佐藤正、同室専門員 帯谷友洋、同室主事 五十嵐貴明、荘内病院副院長兼地域医療連携室長 吉田宏、同院事務部長 土屋清光、同参事兼総務課長 今野一夫、同参事兼地域医療連携室主幹兼医事課長 菅原広光、同地域医療連携室室長補佐兼看護主査 富樫清、同総務課庶務係主事 鎌田貢輝
- 公開・非公開の別 公開
- 傍聴者の人数 12人
- 審議事項(バズセッション)
「3年後の鶴岡市の地域医療がどうなって欲しいか」について
- 発言要旨
 - ・ 医師不足が顕著になっている。例えば、出産では産科医がいなくなり困ったとの声がある。朝日、温海地域では地元で医師がいなかったために通院が大変だ。
 - ・ 地元の医師から日本海病院に結構紹介されている。例えば、荘内病院はどんな診療科目が得意なのか、鶴岡協立病院だったらどんな科目が得意なのかを市民がわかれば、自分の家族の症状に合わせて医者を選ぶことができる。
 - ・ 休日診療所にも専門医がいないと、また次の日に通院する必要がある。住み慣れた地域で暮らすことが難しい。
 - ・ どこで亡くなりたいか。自宅なのか病院なのか。本人が自宅で亡くなりたいと言っても、その意思を伝えていないために、病院に連れて行かれたりすることがある。

- ・本当に亡くなる寸前なのか、何らかの治療をすると生きられるのか否かの判断ができないので、病院に行くべきかの判断ができない。誰かが決めるのは難しい。本人の意思がどこまで伝わっているのかということは今後の課題だ。
- ・認知症の人の施設入所で困ったことがある。一人ひとり千差万別。気持ちが揺らぐこともあり、施設の人も振り回されて頭を悩ませているようだ。
- ・本人がどこで亡くなりたいかを決めたところで、そのとおりになるかはわからない。そういった課題の解決手法などを委員会の題材として取り上げていけたらいいと思う。
- ・鶴岡地域で開業医の数が適正かどうかは難しい。庄内地域には約100くらいの開業医がいる。若い人、中堅どころの開業医はあまり多くない。高齢化がひとつの問題になっている。
- ・病院の医師不足については、現状、大学から派遣を受けないと病院の医師は充足されない。鶴岡の社会的動態は、2005年くらいにはプラスマイナスゼロで、それ以降は200~500人マイナスだ。鶴岡から出て行った人と入った人の差は、ここ15年間ずっとマイナスだ。そこに優秀で若い医者や看護師だけを集めることはなかなか難しい。街としての魅力を高める必要もあるのではないか。
- ・子育てをする支援施設が鶴岡にはない。冬に小さい子を走り回らせたいとなると、山越えをして内陸まで行かなければならない。地域医療だけの話になってしまっただけでは問題は解決しない。そこに横の繋がりも含め、街の魅力、街の活性化をセットで議論しないと解決しない。
- ・医療や病院は社会の大切なインフラだ。子育てしやすいような街、住みよい街、お年寄りも安心して住める街、そのベースには医療がしっかりしないと駄目だ。
- ・医療過疎、へき地に住む人から「近くにお医者さんが欲しい」というニーズはあるが、人口が減って急性期を診る医者はそんなに必要ないだろうという、つまり want はあるが、全体的でみればそこに need はないだろうという戦いがある。
- ・庄内、鶴岡は魅力ある地域で、慶應の先端研には社会人大学院生として30代の企業の中堅社員が何名か入っている。最低でも2~3年は住民票を鶴岡に移して住みながら何か地域を活性化するような取り組み、例えば、ヘルスツーリズム、山伏修行とか健康な食事と健康診断等を組み合わせたような旅行のプランを作って実証したり、地域貢献するビジネスを起業したりとか、そうした活動をして修士号を修めている。
- ・フィールドワークしながら、実に沢山の地域の魅力を発見している。それはもしかすると、よそ者の目から見るとすばらしい資源だが、地域に長年住んでいる方にはそれほどは宝物、資源として写らない可能性もある。鶴岡は幸い、慶應だけでなく、公益大の大学院、山大農学部もあり、若い人たち、学ぶ意欲のある人達も入ってきている。
- ・定住人口だけでなく、関連人口を増やしていく。その人達が魅力を発信するということが有効で大切なことではないか。
- ・庄内病院が結構頑張っているという話があった。しかし、病院が75点を取ってもそれでは足りない。95点とか100点近い点数、「庄内病院すごいよね」というキラリと光る何か特徴を出さないと、なかなか厳しい中で合格点が出ない。
- ・100点に近づく庄内病院にするためにはどうしたらいいのか。もし、次回のテーマが決まっていないうなら、庄内病院について委員が感じていることを出し合いながら、庄内病院をどうやって魅力的にするかを話し合っても良いのではないか。
- ・医療者だけでは解決しないことなので、街づくり、地域づくり、若い人も鶴岡で働きたいと

思ったり、I ターンの人が来てくれるようにはどうしたらいいのかを、次回でもその次でも話をしたらどうか。

- 様々な視点が出てきたので、前向きに楽しい未来になるにはどうしたらいいのかを考えると良いのではないかな。
- 荘内病院に空室があったら、一室を使って傾聴カフェの場所を設けたい。常時オープンし、例えば若い人も来たり、お年寄りが自分たちの経験したことを語り合ったりしたいと思う。がん患者は、相談する人が多ければ多いほど、語り合える場があればあるほど元気になれる。そういう活動をしたい。
- 傾聴カフェは、是非実現できるように、来年早々にでも開設したいと思っている。
- 次回、委員の皆さんがどんな思いでどんな活動をしているかのお話を聞きたい。資料だけでも構わない。
- 今日、皆様から頂いたご意見と秋山先生からの提案を含めて次回以降の流れと内容について検討する。